

# 環境保全と人間の発達

浅野慎一『人間的自然と社会環境：人間発達の学をめざして』大学教育出版、2005年

## 第 I 部 人間環境と自然・社会 第 5 章 環境保全と人間の発達

### 《克服すべき「常識」》

豊かな生活を求める人間の本源的欲求が、環境破壊の元凶だ。その意味で私達は等しく、環境破壊の被害者であり、加害者でもある。私達は自らの生活様式を見直し、欲求を抑制しなければならない。

#### 【1. 環境保全の4つの観点】

①環境破壊が生じてしまった場合、それに対処できる方法としての知・能力。

因果関係の正確な認識、適切に対処しうる科学技術・生産力。

②環境破壊が生じてしまった場合、それに対処できる価値基準。価値的な知・能力。

人間の「生命－生活（life）」の保持を最優先。

③環境破壊をできる限り未然に防止。科学万能主義の批判。

先端的な科学技術の安易な実用化を阻止。徹底したアセスメント。

④「無知の知」。有用性・効率性等の基準で安易に序列化・評価しない。

最も困難・重要＝②価値基準。

主要な環境破壊←人間の「生命－生活」の保持より、それ以外の目的を優先。

学術研究：最も困難：「無用の用」。

ex) 納税者への「説明責任」？＝「無用の用」の軽視。

「自然の無限性＝人知の有限性」：人間が科学を発展させる最大の客観的根拠、主観的動機。

「無用の用」の軽視→科学・知の発展の最大の客観的根拠・主体的動機を脆弱化。

#### 【2. 利潤増殖を目的とした環境破壊】

「無用の用」・人間の「生命－生活」よりも優先されがちな目的＝利潤増殖。

一部のエコロジスト：利潤増殖より、豊かな生活への人間の本源的欲求が環境破壊の元凶。

BUT = 「人類の進化の開始＝人類の終焉の原因」、「死因＝生まれたこと」と同じ。

無意味な言説。

#### 【3. 環境を保全する欲求と知】

一部のエコロジストの認識＝人間の知・科学・生産力の発達を一面的に把握。

人間の知・目的意識性＝人間のより豊かな生活への本源的欲求を原動力として発達・発揮。

人間＝自らの「生命－生活」を脅かす環境破壊の危機を、自らの知によって認識、

目的意識的に克服。

ex) 核戦争を阻止する世論・運動、

豊かな生活を求める本源的欲求（知・目的意識性）に基づく環境破壊の阻止・環境保全運動。

#### 【4. 「先進」諸国の生活の「豊かさ」】

人間の豊かな生活＝人間にとって適切な環境の保全。

土壌・大気・水等の汚染、生態系破壊≠「人間の豊かな生活」、「人間の利益」。

ブラッドフォード<sup>1)</sup>：「開発計画も、水の汚染も、土壌の浪費も、大量の難民や大量虐殺も、どれ一つとして、『人間のニーズ』や『人間中心主義』の結果として起こっているものではないし、人口爆発の直接の結果として起こっているものでもない。こうした現象が起きているのは、むしろ資本の蓄積のためであり、地球規模の帝国主義ピラミッドをスムーズに機能させるためである」。

「先進」諸国の生活様式＝「豊か」ではない。

ex) 飽食、肥満、生活習慣病、人体汚染、アレルギー症、「先進」諸国に固有の汚染・環境破壊。なぜ、「先進」諸国の生活様式を「豊かだ」と錯覚するか？

①より豊かな生活への想像力・創造力の欠如・摩耗。

人間の本源的欲求＝利潤増殖によって脆弱化。 ex) スマホ・携帯電話。

②第三世界諸国の「貧しい」生活との比較。

地球規模のグローバルな経済格差＝利潤増殖を至上目的とする資本主義的生産様式の産物。

#### 【5. 市場原理の限界】

「利潤至上主義の生産様式（資本主義）の見直し」よりも、「人間の『豊かな』生活様式の見直し」が必要と主張する人々。

＝市場原理を前提（消費者が変われば生産者も変わる。「賢い」消費者が社会を変える）。

BUT 市場原理＝万能ではない。「消費者＝人間」ではない。

市場：消費者以外の人間の需要・必要には無関心。 ex) 古紙等のリサイクル、エコ商品。

市場：あらゆる個人は自己利益を追求。

アダム・スミス<sup>2)</sup>「公共の幸福のために商売しているというふりをする人々が幸福を大いに増進させたなどという話を聞いたことがない」。

利潤を無視して人間の需要・人間の本当の必要に応える企業：市場競争で淘汰。

市場：消費者も市場（交換価値）の論理に容易に取り込まれる。

大量生産・大量販売を前提。

「環境を破壊する商品を多少使っても、また使うのをやめても、大勢に影響しない」。

市場を通して身近な環境を保全する「賢い消費者」＝環境破壊を外部に転嫁。

ex) 植物性油脂の消費増加→森林伐採、アブラヤシのプランテーション化。

「エコ商品」を買えない人々の自己責任？→市場原理の構造的矛盾を看過・免罪。

#### 【6. 南北格差・階級格差】

「人間の豊かな生活＝環境破壊の元凶」説：世界の人々が等しく豊かな生活を実現、その膨張が環境破壊を創出？

No! 世界規模での貧富の差・階級格差、貧困の蔓延。

環境破壊の地球規模への拡大←豊かな生活の地球規模への拡大ではなく、多国籍化した巨大資本による生産・開発が地球規模で展開。

多国籍企業：生産地域の環境保全に永続的責任を負わない。現地の市場向けに生産しない。

「先進」諸国民・政府：「資源枯渇＝地球と人類の危機」と称して国際政治の俎上に。

→途上国の工業化・開発を抑制。

BUT 資源枯渇の危機感・恐怖＝資源を大量消費する「先進」諸国民のみ。

環境破壊の被害にみる階級性：第三世界、貧困層、過疎地、少数民族＝より深刻な環境破壊の犠牲。

「豊かな生活への欲求＝環境破壊の元凶」？！。

ロラン<sup>3)</sup>「すべてを所有している時に社会を否定するのは、最上の贅沢である。なぜなら、かくして社会に負うところのものを免れるからである」。

地球規模の経済格差（南北問題） & 一国内の格差（階級・民族・地域問題）＝利潤増殖を至上目的とする資本主義的生産様式の必然的結果、不可欠の構成要素。

## 【7. 生産・開発様式の変革】

「皆が被害者、皆が加害者」？

市場原理を自明の前提→利潤取得者の責任を曖昧に。

「環境破壊が人間の本源の欲求に根ざす→解決不可能」とするニヒリズム。

より魅力的な生活やそれを創出する生産様式のビジョンを提起できず、

→「貴重だが少数の取り組み」の幻想に。

貴重な取り組み＝市場で商品化されなければ多数派にならず、商品化されると利潤増殖との矛盾に直面。

社会的ジレンマ＝複数の主体が相互規制なく各自の利益を追求して合理的に行っているにも関わらず、その集積結果が集合財の悪化を引き起こし、個々の行為主体にとって不利益をもたらす現象。 ex) 交通渋滞。

社会的ジレンマ論：かつての公害問題＝加害者（企業・行政等）と被害者（住民）の対立図式が明確。

BUT 1980年代半ば～、ゴミ・生活排水・騒音（新幹線・空港・道路等）、自家用車による大気汚染等。

住民・消費者の生活様式＝公害の発生源。「加害者」と「被害者」がその時々で逆転。

& 地球温暖化・資源枯渇等、地球規模の環境破壊：「より便利で豊かな生活様式」を求める消費者・個々人の私的利益の追求という行為の集積結果。社会的ジレンマ。

BUT 社会的ジレンマ論の誤謬＝利潤の取得者 & 消費者を 私的利益の追求者として同一視。

資本主義下の市場：消費者に利益をもたらす機構ではなく、利潤増殖の装置。

社会的ジレンマ論者：せいぜい消費社会・ライフスタイルの見直し、市場に一定の規制。

資本主義的生産様式の構造的問題に踏み込まない。利潤取得者の責任を曖昧に。

石弘行<sup>4)</sup>「『環境』という語は便利な言葉である。大気や水を汚染させて他人の健康をそこなう犯罪行為も、この言葉で希釈されてそこには何の罪悪感も痛みもない。とくに『地球環境』という言葉が登場してからは、『私も加害者、あなたも被害者』と、本質は一段と拡散し、免罪符の趣さえある」。

& 井上孝夫<sup>5)</sup>：社会的ジレンマ論批判：「本来、ジレンマは解決不能だからジレンマなのであって、解決を見いだすことは論理的に矛盾して」いる。

社会的ジレンマ論をふまえた解決策＝ジレンマの前提条件の変更。

それが可能なら、最初から「社会的ジレンマ」という問題設定をする必要はない。

環境破壊の克服：単に生活様式・ライフスタイルの見直しにとどまらず、

資本主義的な生産・開発様式の変革。

利潤増殖を至上目的とする資本主義的生産様式：人間の生産力を「破壊力」に、生活様式を「死の様式」に歪曲。

ブクチン<sup>6)</sup>「資本主義は事実上、社会と自然界への絶対的否定の地点を構成する。誰も自らに『エコ資本主義』などとエコロジ的な接頭辞をつけた形では、この社会秩序を改善したり、改良したり、資本主義の枠内で作り直すことはできない。資本主義はすべての社会的な病を包含するがゆえに、私たちの唯一の選択肢はそれを破壊することである」。「資

本主義市場経済のもとでの『成長の限界』について語ることは、戦士社会のもとでの戦争の限界について語ることに同様に、無意味なのである。今日の多くの善意の環境主義者によって主張される敬虔な行為は、多国籍企業の道徳的敬虔さがごまかしであるのと同様に、ナイーブである。人間に呼吸を止めるよう『説得する』ことができないのと同様に、資本主義に成長を止めるように『説得する』ことはできない。資本主義を『グリーン』に『エコロジック』にしようとする試みは、際限のない成長の体制としての資本主義体制の本質そのものによって、失敗を運命づけられるのである」。

「持続可能な発展・開発 (sustainable development)」の意義と限界

意義：人間の「生命－生活」の持続可能性 (=人間中心主義の発展・開発) を提唱。

「人間 VS 自然」、「自然保護 VS 発展・開発」等の単純な二元論・二者択一を克服。

生活様式・ライフスタイルの変革にとどまらず、生産・開発様式の変革を提起。

限界：克服すべき生産・開発様式の内容＝あいまい。

1992年地球サミット (環境と開発に関する国連会議) : アジェンダ21 : 多国籍企業の民主的規制には触れず。多国籍企業の主張→完全実施も妨害。

## 【8. まとめ】

《克服すべき「常識」》

豊かな生活を求める人間の本源的欲求が、環境破壊の元凶だ。その意味で私達は等しく、環境破壊の被害者であり、加害者でもある。私達は自らの生活様式を見直し、欲求を抑制しなければならない。

**NO!** 環境破壊の元凶＝人類の生産力が利潤増殖至上主義 (資本主義) によって歪曲。

人間の「生命－生活 (life)」より、利潤増殖を優先。

∴ 環境保全＝豊かな「生命－生活」を求める人間の本源的欲求に基づき、  
生産・開発様式を変革。

環境保全の4つの観点

①環境破壊に対処できる方法としての知・能力。(科学技術・生産力)。

②環境破壊に対処できる価値的な知・能力。人間の「生命－生活 (life)」の保持を最優先。

③環境破壊をできる限り未然に防止。科学万能主義の批判。徹底したアセスメント。

④「無知の知」。有用性・効率性等の基準で安易に序列化・評価しない。

「人間の豊かな生活 (利益)」と「資本の利潤増殖 (利潤)」を同一視しない。

人間の「生命－生活」の必要に基づき、生産・「開発 (development)」様式を

「発展 (development)」させること、& それを担う人間の「発達 (development)」。

## 引用・参考文献

- 1) ブラッドフォード, J. (1995) 「私たちはみなポパールに住んでいるのだ」 (池田真理訳) 小原秀雄監修『環境思想の出現』東海大学出版会、263頁。
- 2) スミス, A. (1965) 『諸国民の富 (3)』 (大内兵衛・松川七郎訳) 岩波文庫、56頁。
- 3) ロラン, R. (1986) 『ジャン・クリストフ』3巻 (豊島与志雄訳) 岩波文庫、69頁。
- 4) 石弘行 (1994) 「こんな地球に誰がした」『環境学がわかる』朝日新聞社、6頁。
- 5) 井上孝夫 (2001) 『現代環境問題論』東信堂、62～63頁。
- 6) ブクチン, M. (1996) 『エコロジーと社会』 (藤堂麻理子・戸田清・萩原なつ子訳) 白水社、124頁。